

看護学科卒業生 鈴木佳奈 さんへのインタビュー 「看護で国際協力にどうアプローチするかが私の課題」

Q1. 簡単に自己紹介をお願いします。

私は、2011年に当大学看護学科を卒業し、臨床経験を得たのち、2016～2018年に感染症 AIDS 対策員としてケニアで活動しました。現地での経験がきっかけで、2018年から当大学院の感染看護学専攻で大学院生として勉強しています。

Q2. 感染症エイズ対策員としての活動と、現地ケニアでの苦労があったら教えてください。

現地では、2つ活動を行いました。1つ目は、病院における質管理の supervisor として病院職員を対象として 5S（整理、整頓、清掃、清潔、しつけ）の啓蒙活動を行ったこと、2つ目は HIV 陽性者のピアグループの支援として当事者たちに物づくりを指導し、収入向上を設立・運営できるように支援しました。海外生活で苦労したことは、“時間の使い方”です。現地の方は、日本人と違って時間を守るという文化がありません。こちらが思っている計画通りに進められないこと、約束できないことが多々あり最初は戸惑いました。しかし、時間が経つにつれて、時間の感覚にも慣れ、約束した時間より2時間遅れて出発するなど妥協して行動できるようになりました。あくまでも、ケニアの方々の文化を許容しその中でうまくやっていくことが重要なだと学びましたね。

Q3. 看護師の臨床経験がケニアでの活動にどのように役立ちましたか？

ケニアの方は有資格者に対して、一目置く傾向があります。例えば、病院での 5S 啓蒙活動では、現地職員にとって異国から来た私たちから指摘・指導されることに対する抵抗感は強いです。しかし、私が看護師免許を持っていることで現地職員の受け入れてもらいやすかったと実感しています。また、看護師として日本の大学病院で勤務していた経験から、様々な背景を持つ職員をまとめていく調整能力も役に立ったと思います。



<ケニアでの活動>



Q4. 大学院に進学したきっかけと、現在大学院で学んでいることについて教えてください。

現地の病院では、看護師が点滴をつないだり処置をする一方で、けがをして動けない患者に物を取らせたり、患者の清潔ケアは家族が行うものという理由で不潔な状態を放置する場面を目の当たりにしました。私は、看護とは何か、人を見るとはどういうことなのか、それと同時に自分自身の看護に自信がないことにも気づきました。また、HIV 陽性者の支援を通して「なぜ男性は HIV 予防活動に参画できていないのか、男性の参画を進めるにはどのようなプロジェクトが考えられるのか」という clinical question を持ちました。母校で看護学を学び直したい、活動での疑問を明らかにしたいという思いで大学院の進学を決めました。

大学院では、研究のノウハウや様々なご立場の先生方から国内外の感染症看護について学ぶことができます。大学院での学びを得て、自分の考え方や視野が広がったと思います。

Q5. 今後の目標や展望について教えてください。

看護師は病院だけでなく、どこにいても活躍できると思っています。今後もアフリカを中心とした感染症対策に携わりながら、国際協力における看護学のアプローチ法を模索したいと思っています。これはきっと私にとって生涯のテーマとなると思います。

Q6. 大学院進学や海外での活動を目指す学生へのアドバイスををお願いします。

まず行動してみてください。言語のハードルが高いこと等、自分には難しいと思うことがあると思いますが、興味関心があるのであれば挑戦してほしいと思います。私もまだまだ言語の習得は未熟ですが、現地でないで学べないことが沢山あり、日本と比較することで今までの気づきも変化します。私は、現地の対象者と対面し関わることで、「この人たちの力になりたい」という具体的な想いが突き動かされ、行動の動機付けになっています。



<左：修士課程の研究でお世話になったナイロビ大学の先生方と一緒に>



<右：第23回東アジア看護学研究者フォーラム（EAFONS）にて研究発表>